

審査結果の要旨

報告番号	甲 第 1373 号	氏名	木原 康宏
審査担当者	主査	古川 恭治	(印)
	副主査	スフ 亨	(印)
	副主査	岡田 義信	(印)
主論文題目：Impact of acute cholecystitis comorbidity on prognosis after surgery for gallbladder cancer: a propensity score analysis (急性胆嚢炎の併存が胆嚢癌手術後の予後に与える影響の検討 ～Propensity score analysis～)			

審査結果の要旨 (意見)

本研究は胆嚢癌手術時の急性胆嚢炎の併存が手術後の生命予後に与える影響を調べるため、過去 30 年間の胆嚢癌手術例 218 例を胆嚢炎併存の有無で 2 群に分け、全生存期間(OS)と無再発生存期間(RFS)に対する比較を行った。解析では、観察研究における群間比較を行う場合に懸念される潜在的な交絡によるバイアスを取り除くために、傾向スコア分析を用いている。術中の胆汁漏出の有無を傾向スコア算出の共変量に含め調整した上で、さまざまな傾向スコア法を用いて比較するなど、慎重に解析を行った結果、傾向スコアを用いた全ての解析において OS 及び RFS が併存群において有意に低くなった。この結果から、胆嚢炎の併存が胆嚢癌手術後の予後に悪影響を与える可能性が示唆されるなど、患者の予後や生活の質の向上に貢献し得る新たな臨床的知見が得られた。本論文の結果や内容は、博士号に相当する価値を有すると評価できる。

論文要旨

胆嚢癌はその診断、治療時に急性胆嚢炎を併存していることがある。胆嚢癌手術時の急性胆嚢炎の併存が手術後の生命予後に与える影響を明らかにする。単一施設の過去 30 年の胆嚢癌手術例を retrospective に解析した。胆嚢炎併存の有無で 2 群に分け、患者背景としての臨床因子を傾向スコアとして算出し、解析に用いた。術中の胆汁漏出の有無も共変量に含め調整した。1:1 マッチング、逆確率重み付け法(IPTW)、truncated IPTW、を用い、2 群間の生存時間解析 (OS、RFS) を行った。218 例を解析対象とした。胆嚢炎併存群(37 例)は非併存群(181 例)と比較し、傾向スコアを用いた全ての解析において OS 及び RFS が有意に低い結果であった。Cox 比例ハザードモデルにおいて、OS、RFS における各解析で、胆嚢炎併存群は死亡および再発リスクが高かった。炎症によるサイトカインが癌の微小環境に作用し、がん細胞の細胞活性や浸潤能を亢進させ悪性度が高くなり、生命予後に negative な影響を与える可能性がある。胆嚢炎併存群は術後の胆嚢周囲の局所再発が多く、炎症による胆嚢内の圧上昇によるがん細胞の周囲への seeding を助長させる可能性が考えられた。